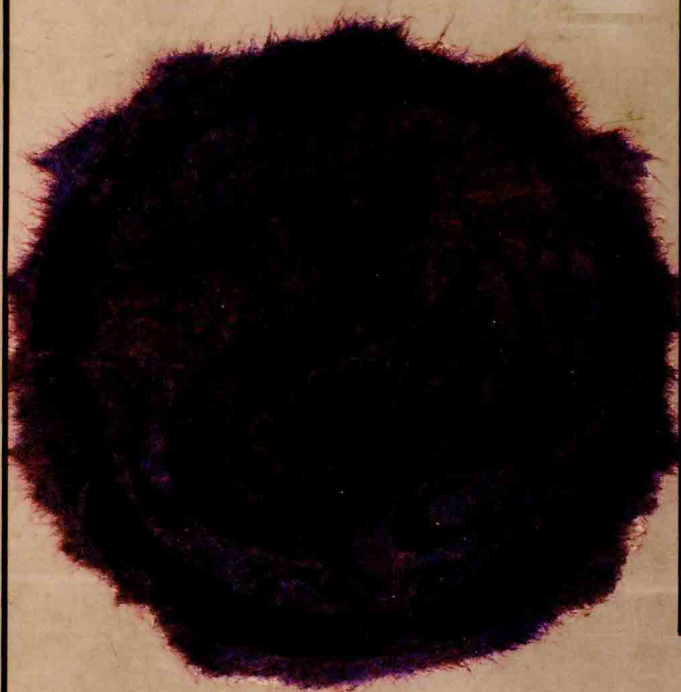


駒田信二編

中国古典散步



文藝春秋

中国古典散步

駒田信二編

文藝春秋

駒田信二略歴

1914（大正3）年三重県生れ。40年東京帝国
大学文学部支那文学科卒業。中国文学者、作
家、文芸評論家。主著に『脱出』『好色の戒め』
『島』『対の思想—中国文学と日本文学—』『壺
中の天』『中国故事はなしの話』『世界の悪女
たち』など。79年、「文学界」同人雑誌評グル
ープの1人として第27回菊池寛賞を受賞。

中国古典散步

昭和六十年十月二十五日 第一刷

定 価 一〇〇〇円

著者代表 駒 田 信 二

装幀者 鴫 田 幹

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表（〇三）二六五—一二二一

印刷 凸 版 印 刷

製 本 矢 嶋 製 本

万一、落丁・乱丁の場合はお取替致します

目次

I 中国古典散歩……………*解説・駒田信二

『論語』あらべすく……………阿川弘之

*『論語』の多様性……………

『史記』を書いた男——司馬遷……………後藤明生

*『史記』における個人と歴史……………

李白のまぼろしを求めて……………伊藤桂一

*放浪詩人李白……………

望郷の詩人杜甫……………竹西寛子

*杜甫の窮迫の旅……………

長恨歌……………瀬戸内晴美

*白居易の広い眼……………

耿漳「秋日」……………	藤沢周平	78
*唐代の詩について……………		87
蘇軾「子由の『踏青』に和して」……………	牧羊子	92
*蘇軾の広さと深さ……………		101
わが愛する『紅樓夢』……………	安西篤子	106
*『紅樓夢』の近代性……………		114
柴田天馬訳『聊斎志異』……………	三浦朱門	119
*科挙の万年落第生……………		128
魯迅『鑄劍』——「故事新編」……………	尾崎秀樹	133
*魯迅の小説の重さ……………		142
ある女の手記『腐蝕』——茅盾……………	井上光晴	147
*リアリズム作家茅盾……………		155
巴金先生と『家』と……………	木下順二	160
*巴金の優しい眼……………		167

Ⅱ 私の諸子百家……………駒田信二

論語	その隠者との出会い	175
孟子	その民本主義と王道	185
老子・列子	その無為の有為	195
莊子	その「渾沌」と多弁	205
墨子	その愛と利の論理	216
荀子	その「天」の否定	226
韓非子	その非情の爽やかさ	236
管子	その管鮑の交わり	246
孫子・呉子	その道家的と儒家的思考	256

中国古典散步

I

中国古典散步

『論語』あらべすく

阿川弘之

子曰ク、人ノ過チヤ、各々其ノ黨ニ於テス。過チヲ觀テ、斯ニ仁ヲ知ル。

『論語』に関する随想を書けと言はれて、

「無理ですよ、そんなもの」私は答へた。「『論語』なんかくくに知らない。怪しげな知識でまちがひだらけのことを書いて、天下の物笑ひになるのはいやだ」

「しかし」

あなた、五年ほど前、『論語知らずの論語読み』と題する本を世に出したではないかと言ふ。

「出しましたけど、あれは『論語』を語つたものではありません。『論語』の言葉をダシに、奇友珍友の言行、身辺家族のことを綴つたその日その日の埋め草随筆です。それでも多少『論語』の内容に触れる場合があるから、さういふ時は二信亭田句馬先生といふ人に助け舟をお願いした」

「知つてます。駒田信二先生でせう」

御指摘通り、駒、田、信、二、を上下左右つなぎ合せて二信亭田句馬先生と戲称してゐた。駒田さんは私にとつて先輩作家であり、同時に中国文学中国哲学の造詣深い碩学だが、昔流コチコチの漢学者とも今流左がかりの中国研究家ともちがひ、物の見方が柔軟で、話が大変面白かつた。『論語知らず——』の一冊は、駒田さんから色々ヒントを頂戴して出来上つたやうなものである。『ですから、それでいいぢやないですか』

「何が？」

「今度も、駒田先生に専門家の立場での跋文解題をお願いします。あまり脱線すれば、駒田先生が適宜つくろつて下さるはずです。だから、安心して何でもお書きになればいいんです」といふ次第で、再び、怪しいところは駒田さんに下駄を預けることになつた。

子曰ク、周ハ二代ニ監ミ、郁々乎トシテ文ナル哉。吾ハ周ニ從ハン。

ろくに知らないと言つても、私どもの世代は、小学校の時国定教科書に『論語』が出て来、中学で漢文の時間に習ひ、旧制高校でまた『論語』『孟子』を教はつたから、中国のこの古典にある種のしたしみは持つてゐる。意外に生き生きと訴へて来るリズムがあつて、そんな遠い遠い昔の人の言葉といふ気がしなかつた。

一方、私どもの学生時代、世は国粹主義の花ざかりで、学者もジャーナリズムも日本精神を礼讃し、世界で最も優れた国家は日本であるかのやうに言つてゐた。優れてゐる所以の一つとして強調されたのが、日本は如何に古い国かといふことで、愛国行進曲の歌詞にも、「ああ、悠遠の

神代より」とある。

これはしかし、高校生程度の頭で考へても少し変であつた。西洋史と東洋史と『論語』を一応勉強してゐる。神武天皇即位より二千六百年、仮りに額面通り受け取るとして、日本建国のころ、シナにはそろそろもう孔子があらはれるぢやないか。ギリシャにヘロドトスやソクラテスが出るぢやないか。わが国古代の天皇や神々や文字の博士が、この人たちに匹敵するだけの実のある言葉を残したとは、聞いたことがない。

美術史の矢代幸雄先生が広島高等学校へ講演に來られて、

「近ごろ、何でも古い古いとみなが有難がりますがね、古くさへありやいいんなら、そのへんの石ころの方が古美術品なぞよりずっと古い」

ヒヤヒヤと拍手したくなつた。

今思ふに、自慢するにしても、日本はシナやギリシャやエジプトとちがふ新しく若々しい国なんだと自慢した方が、未だしも辻褄が合つてゐた。

女王卑弥呼が政治について人間の生き方について、日常どんなことを話してゐたか、時たま想像してみる（これも今の話）けれど、模糊朦朧としてかたちを成さない。卑弥呼は三世紀半ば、孔子さまよりおよそ八百年あとの人物なのに、はつきりしたことは何も分らず、何も記録に残されてゐない。それを思ひこれを思ふと、シナの文明は、古さの一点にかけてやつぱり大したものである。

もつとも、古い古くないの感覚は、見る者の尺度によつてずるぶん変る。エジプトの人は、二千年以上経つてゐない事物をすべて新しいと感じるさうだ。天文学者のスケールはもつと大きい。

「近く超新星の大爆発が起る」といふ学者の談話が新聞に出てゐたので、そんな天空のドラマがいつ見られるのだらうと、よく読んだら、「約三百年後」と書いてあつた。

子曰ク、其ノ以^{モテ}キル所ヲ觀、其ノ由^ヨル所ヲ觀、其ノ安^{ヤス}ズル所ヲ察スレバ、人焉^{イッダ}ンゾ度^{カク}サンヤ、人焉^{イッダ}ンゾ度^{カク}サンヤ。

「お前は右翼や。俺、お前みたいなもんの友だちと思はれるの、と、狐狸庵が私を罵る。半分は冗談だが、半分は一部文壇の声である。

日比谷の交差点を、装甲車まがひのチョコレイト色したトラッちらしながら、赤信号を無視して右折して行く。

「どいて、どいて。愛国車輛が通過します。愛国車輛の通過です。ゐます。どいて下さい、どいて下さい。愛国車輛緊急通過します。どんな違反をしたのか知らないが、うしろからパトロールカーのクの上の、ナチスばりの制服着た若い衆が、

「帰れつたら帰れ。バックヤロウ」

と、警察の車に罵声を浴せかける。見てゐる分にはユーモラスにらひたくない。

何がいやかと言つて、左翼のメンタリティと酷似してゐるからい

間、滝田修をかくまつた者の中に右翼の大親分がゐたと聞いて、なるほどさうだらうと思つた。

ことしの初め、文学者の反核署名運動といふものが起つて、忽ち各方面に波及し、新聞が「反核の大きなうねり」と書き立てる、一時は大騒ぎであつた。私は署名しなかつたが、平素敬愛する作家まで多数名前を列ねてゐるのを見て、がっかりした。「素朴な善意」か「軽い気持の文壇づき合ひ」か、それぞれお考へがあつてのことだらうから、差出口は慎んだけれど、狐狸庵先生にだけはさんざん不平を言つた。

「俺が右翼なら、お前左翼か。阿呆。ソ連の息がかかつた左寄りの運動であること明々白々なのに、自分の利用価値を忘れて署名なんかするの、阿呆だ」

時代の通念からして誰も異を唱へやうが無いやうな運動には、必ずいかがはしいところがある。そのいかがはしさは、旗を振つてゐる人の顔ぶれを見れば分る。十数年前ベトナム反戦で大活躍をし、「解放後」のベトナム情勢には一切頼かむりの作家。韓国の言論弾圧は熱心に非難するが、孔子さまの国のそれは黙つてゐる評論家。どこか、人間の根本のところで信用致しかねる人たち。自分を除外してはいけないけれど、文士といふのいい加減なものですよ。

「平和車輛が通過します。反核平和車輛、緊急通過します。どいて、どいて。反対する者は人民の敵だ」

と言はれてゐるやうな気がして仕方がなかつた。

子ノ燕居スルヤ、申々如タリ、天々如タリ。

昔、『論語』を講じた教師たちの中には、まづ恭しく書物を押しただいてから授業にかかる人がゐた。訓み方も、すべて「子曰、タマハク」であつた。

聖人の書といふので、ああコチンコチンになつては、この古典の持つ本来の味が失はれてしまひさうな気がする。晩年の志賀先生が、

「孔子の言葉とかキリストの言葉とかいつても、幾つかの時の言葉かネ、その齡の人と話をするやうなつもりで僕は見てゐるけどネ」

と語つたことがある。名人志賀直哉の思ひ上りではないだらう。事実、一対一で話すつもりで見ても興味深い言葉がたくさんあるし、孔子の生活自体、コチンコチンの固苦しいものではなかつた。

私が右翼呼ばはりされる理由の一つは、多分、作品の素材に度々海軍を取り上げてゐるから、といふやうなことはどうでもいいけれど、右へよろめく少し前まで、よき時代の海軍には、非常にリベラルでフレキシブルな一面があつた。そのころ文官技官として海軍に在籍し、敗戦後大企業へ再就職した人たちが、異口同音に言ふのは、

「民間の会社つて、こんな窮屈なものかと思ひました」

お前たち、アングルバーちや駄目だぞ、フレキシブル・ワイヤーでなくちやいかんと、士官の卵どもは教へられた。鉄の角材（アングルバー）は一見強さうだが、その物として何の用もなさない。鋼索（フレキシブル・ワイヤー）は見たところグニャグニャ、如何にもだらしが無ささうだが、重量物を吊り上げて自由自在の働きをする、船乗りは物の考へ方も身のこなしも柔軟でなくては勤まらんといい意味であつた。